寄せ太鼓

北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号（〒807-1261）
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

今年の祇園祭が間近になりました。令和2年からのコロナウイルス蔓延防止対策を受け、祇園祭を取り止めていましたが、今年4月1日に須賀神社及び神社責任役員と一番山当番町中道・二番山当番町新地の氏子総代が参籠殿で集まり、今年の祇園祭については、開催する旨全会一致で決定しました。

5月には実行委員会が立ち上げられ、神事・奉納行事・祭り全般の運営と山笠制作等の運営方針が決定します。

この方針を受けて木屋瀬の皆様に運営資金の御寄付の御願いを致します。祇園祭は皆様の御寄付で成り立っている皆様の祭りです。宜しくお願い申し上げます。

山笠は神社正面に建つ山笠会館にて青年会を中心に住民の手により休日や仕事が終わった夜間に制作されます。人形の題材は当番町内で協議し決定されますので今年はどんな人形や飾りになるか楽しみです。

制作にあたっては「梶棒洗い」・「台かりげ」「台ならし」等行います。

7月8日の祭り当日を迎えて早朝の花火を合図に両町山笠事務所から駆け足でお汐取りに出発し祭りの始まりです。

山笠巡幸、夜の宵山笠神社への山笠奉納行事、翌日の集団山笠巡幸、追い山、宮入へと進みます。宮入は最後の行事で各当番町の見せ場で有り、山笠を動かす人も見物人も興奮の頂点に達し、今や遅しと宮入り合図の花火を待っています。奉納も宮入も、それぞれ当番町が考え工夫して勢いと豪快さをみせます。

一方、祭りを安全円滑に行う為に、両山笠の運行方法の協議する掛合い・山笠の運行・通行車両との安全確認・山笠を引く子供達を見守る保護の役割担当者が安全に山笠の運行に務めます。また、祭り準備・当日と、賄いの担当である女性の皆様の活躍が祭りを盛り上げます。

こうした、多くの皆様方の力で祭りは成り立っていますので、祭りの無事成功に向けて皆様方の御理解と御協力を心から御願い申し上げます。

長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会
広報部会長　藤　政文

長崎街道ひなまつり「木屋瀬宿～立場茶屋銀杏屋」ご来場ありがとうございました

令和5年2月11日～3月26日にて、長崎街道沿いの文化施設4館が連携して行ったイベントである「長崎街道ひなまつり」では、盛況のうちに終了いたしました。

来館された皆様には、きらびやかなひな飾りと共に、長崎街道の歴史と地域の文化を楽しんでいただけたのではないかと思います。

第88回企画展

二川秀臣（ふたがわひでおみ）作品展 長崎街道の宿場町 開催中

現在、みちの郷土史料館では、第88回企画展「二川秀臣作品展　長崎街道の宿場町」を令和5年6月25日（日）まで開催中です。

本展は、宗像市在住の版画家である二川秀臣氏の、長崎街道に関連する作品約70点を展示する収蔵作品展です。令和3年に当館に寄贈された版画・スケッチは、全183点に上りますが、その中でも特に宿場町に関わる作品を展示しています。

長崎街道や版画、または風景画にご興味のある方は、ぜひこの機会に町歩きをしている気分で当館に足を運んでみてはいかがでしょうか。

第17回 筑前木屋瀬 今昔歳事記

紅屋泰助氏（故　柴田泰助氏）の「筑前木屋瀬今昔歳事記」の第17回目です。

今回は、「ひろば北九州」平成22年12月号の行事・風物について、後編としてご紹介させて戴きます。

人生の節目飾る〔子供ゑビス・頭〕

大人の仲間入り儀式

次に〔子供ゑビス・頭〕をご紹介します。此れも宿驛往時よりの伝統行事で、数え年十二歳になった男児が若衆の仲間入りをする儀式でございます。十二月の第一土・日曜日に行われます。

昔は男児が此の年頃に達しますと奉公に出たり、あるいは家業の手伝いをするなど、子供の時代に別れを告げる習慣がございました。「武家社会の元服」に相当する町方の行事だと考えられます。頭の儀式の後は先輩たちから大人としての気構え・習慣・生活態度などを厳しく教わったと伝えられて居ります。

尚、元来は神仏混淆時代の行事だったようです。明治の頃まで、子供たちは寒念仏を唱えながら近隣の農村を行乞し、そうして得た米や野菜などを持ち寄って蛭子堂（本町三町と新町三町の基々に在った青年宿）に籠り、子供たちだけで行っていたようです。しかし、何時の頃からか、頭の子供（数え年十一歳になった男児）を持つ親たちが御神輿・笹山笠・祝膳で祝う行事へと推移しながらも、親から親へと代々受け継がれて現在に至っています。

世情の移ろいと共に形式は変われど、頭の子供たちは一週間に亘る子供山笠太鼓の練習と二日間の行事（山笠運行や御神輿行列など）によって仲間への思い遣りや協調性を学びます。又、行事を支えてくれた加勢人（前年の頭の子供）・先加勢人（前々年の頭の子供）・万加勢人（それ以外の全先輩）や世話人を通じ、地域の人々への感謝の心を学び得るのです。当地・木屋瀬に生まれ育った男にとって「人生の節目を飾る儀式」として生涯忘れることの無く、郷土の誇りとなる伝統行事でございます。

〔子供ゑビス・頭〕の唄

御神輿行列で歌われる唄

泊まれ　泊まれ　旅の客　足も手も
つめたかろ　セートンテントン
雪　まるかし　かんしょうぶ　足も
手もつめたかろ　セートンテントン
豆腐　こんにゃく　山芋　生で喰え
ば　がじがあじ　焼いて喰えば
ほーやほや　セートンテントン
（トンテントンは太鼓の音）

木屋瀬宮日は晩宮日
お宮日しまえりゃ「神あるき」
サアサお籠り蛭子堂
頭は布団を持って来い
去年頭が加勢人
おと年頭が先加勢人
万加勢人は恐ろしい
お堂の蔀にゃ　風の音

岩井屋不彫作「子どもゑビス唄」

つづく（記念館）

第21回 木屋瀬芸術祭

大型連休期間中である5月3日～5日にて、第21回木屋瀬芸術祭を開催いたしました。芸術祭では、1日目に、木屋瀬中学校吹奏楽部のコンサート、プロの演奏家による木管五重奏コンサート。2日目に、石炭に関する長崎街道歴史講演会とシンポジウム、また芥川龍之介作品の朗読劇。そして3日目には、毎年恒例の筑前各地の伝承盆踊りの披露が行われ、非常に盛り上がりを見せました。

また、記念館周辺でも芸術祭に合わせた様々なイベントを催していただいたことで、より一層活気をもたらしたと存じます。本イベント開催に際して、多くの方々のご協力を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

シリーズ

文化の薫る町 木屋瀬

第八回 大義山永源寺 開創五百年法要

令和五年五月十四日、曹洞宗大義山永源寺は開創五百年を迎え、本堂におきまして雅楽が演奏される中厳かにお祝いの法要が執り行われました。当寺は、往古金剛山のふもとの金剛にあって、金剛寺と称し七堂伽藍を整えた大寺でありましたが兵火に遭い消失しました。その後、野面の寿福寺内に居を構えていましたが、大永三年（1523）木屋瀬の現在地に成山宗功禅師が開創されました。この時の年号が「大永」でありましたので、その年号を二つに割り、山号を大義山、寺号を「永源寺」と改称し開山しました。また、寛文五年には安国寺末寺となり、暫時伽藍の整備を進めながら、現在の住職で二十三代目、五百年に渡っています。現在の山門は、大正十二年（1923）に建立され、当時京都の清水寺の貫主であった大西良慶老師を迎え落慶法要を行っています。又、明治三年の本陣廃止に伴い、本陣の門を移設して永源寺の山門として使用していましたが、新しく山門建立に伴い、裏門に本陣門を移動し現在に至っています。本尊は、元禄十一年（1698）四月、大宰府の観世音寺（戒壇院）より奉納されています。

仏像は、「聖観世音菩薩」で、信仰の対象としても、文化財としても貴重な仏像で北九州市指定有形文化財として登録されています。

本尊は、樟材の一木造り立像であります。胎内に収められた木札から、元禄十一年（1698）と享和三年（1803）に修復が行われています。この度二百二十年ぶりに本尊の修復が行われました。その結果、仏像の制作年代を従来鎌倉時代と推定していましたが、それより古く平安後期と判明しました。大きさは、九十六センチで均等の取れた立像です。顔はふっくらした和様のお顔で慈愛に満ちた目が印象的です。永源寺では、開創五百年の記念行事として、境内墓地にシンプルで明るく近代的な「観音堂（永代塔）」合同墓が建設されました。堂内に座し仏像を拝観しているといろいろなことが心に浮かびます。木屋瀬のご先祖の方々がどんな気持ちでお詣りしたのだろうか、目の前の仏像にいろいろな願いごとや悲しみや苦しみを訴えたかもしれません。それらを受け止め微笑で返してくれたのが、目の前の観音菩薩様です。拝観しているこの堂内は木屋瀬の先祖を訪ねるタイムスリップの場でもあります。私達は観音菩薩様を見ているようで仏像からみられているのかもしれません。

参拝は、このように無限の想像を広げてくれる旅のようなものです。現代人はあまりにもお詣りの機会も時間も少ない、もう少し仏像と向き合う時間を増やし楽しさを味わってほしいものです。

永源寺山門

観音堂（永代塔）

開創法要の様子

聖観世音菩薩像（市指定有形文化財）

大銀杏散りて芽吹くや五百年

本町　野口靖彦

木屋瀬宿記念館運営協議会 第23回総会を開催

4月26日こやのせ座にて第23回総会を開催しました。事業報告、決算、事業計画、予算の各案が原案通り承認されました。

今年度は理事・監事全員が留任しました。引き続き宜しくお願い致します。

規約を一部改正し理事・監事の任期を2年から1年に変更しました。

令和4年度の来館者数はコロナ前の水準にほぼ回復しました。カルタ大会等実施できない行事も有りましたが、11月に3年ぶりに開催した宿場まつりやひな祭りが好評でした。

今年度も、これまで以上に木屋瀬の魅力（歴史・文化・伝統）を広く発信し賑わいづくりに努めてまいります。地域の皆さまのお声に耳を傾け、充実した運営に心がける所存です。

変わらぬご支援、ご協力を宜しくお願い致します。

木屋瀬宿記念館運営協議会
理事長　山田　靖

昔々の木屋瀬の話

わたしの昔話

新地町の千々和勝蔵さんのお話、対談時九十歳でしたので、今年は百三十七歳と思います。

A…千々和勝蔵さん
B…尋ねた人

B…千々和さんのように長生きされますと、世の中も変わった事でしょうが。貴方はずっと前から、新地町に居られたのですか。

A…ハイエナ私や大火事に焼け出されチ。今ンとこさい移ったとで、それまデャ本町にいました。

B…そうですか。

A…本町ニャとんやも郡家もあっチネエ、何チ言うたチ本陣があっチナイ。今の酒屋ンとこからずーっと自転車屋までが本陣でネエ。白壁の六尺以上もある高ケエ塀がずーっとありましチネエ。大けな門こうめー門がありました。今の天理教のある所が脇本陣でネエ、本陣と脇本陣のあいに天狗銀杏と言いよった、大ケな銀杏の木があっチネエ。これに天狗が巣を喰うチョッたよ。

B…ほほー天狗がね。

A…イタチが出世シチ天狗になったんでネエ私どまあコオメ時、よう石をチョカケよった。

B…殿様の行列やら、覚えておられますか。

A…ヘエーそりゃもうあんた、殿様のお通りになる時分ニャネエヲマエの上に上がっチョルごたあならん。ソーヨ下におれチ土下座シチョリました。「下に下に」チ言うチ。おふれがありまっしょうが。それからは頭を上げる事はならんケンド、そりゃもういやいなもんじゃったネエ。子どもがヒョロヒョロと出たゲナ代官が親をつんのうチ。黒崎までお断りに行きよりましたバイ。

長崎のお姫様が、指金を撒かれましたチナイ。それがあんた行列が通っちしまわっせんゲナ。拾うこたあなりまっせんじゃった。

行列の荷物運びに方々から大層な若者が、ソーヨ馬をつんのうチ来まっしょうが、その馬がヒーンヒーンチ言うチ、町ちん中いっぱい居チ。私どまあ通りぬけきりまっせんじゃった。

こんな時分ニャ、町中がこの人達の宿になりよりましたバイ。

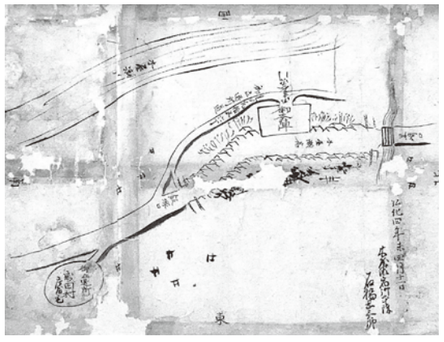
B…大変な賑わいの町になっていたようですね。

A…ヘエーヘエーそりゃあもう大変な賑わいでござした。

本町　柴田由美子

「柴田豊廣遺稿集」より

木屋瀬宿記念館 収蔵品紹介 「御立退所図」



“立退所”とは【立ち退いて仮に移っているところ、または、一時身を寄せている場所】のことであり、図の内容もこの言葉の意味で相違はない。この「御立退所図」は、図内“御本陣”から“御立退所 感田村 庄屋宅（松尾家）”までの避難経路を記したものである。有事の際すばやく行動に移せるよう、木屋瀬に２つあった脇本陣（長崎屋と薩摩屋）のうち、薩摩屋の主人であった石橋甚三郎が 1847 年（弘化４年）４月 11 日に製作したとされる。当時、避難が必要な“有事”とは主に火災のことを指したため、火の手が回りやすい宿内を移動するのではなく、遠賀川の土手から南下して西構口の外を通るルートを経路とした。

（長崎街道木屋瀬宿記念館　学芸員　加藤　悠）

新任職員紹介

主任　綿貫　訓

この度、北九州市役所の4月人事異動に伴いまして、木屋瀬宿記念館でも職員の異動がございましたことを報告いたします。

今後も運営を通じて地域文化の振興・継承に努めて参りますので、前任者同様よろしくお願い申し上げます。